

車窓を楽しめない鉄道の旅 その4
名古屋地下鉄の旅 その③ 鶴舞線

鶴舞線の完走を目指して、桜通線終点の徳重から御器所で乗換えて始発駅の赤池まで移動。

赤池は名鉄豊田線の接続駅で、豊田市駅まで相互乗入れ運転をしているが、この旅では市営地下鉄の部分だけに絞って走ってみることにした。

鶴舞線の始発駅(終着駅)は赤池。現在の所在地は日進市赤池だが、古くは愛知県愛知郡赤池村だった。天正元年(1573年)建立



の曹洞宗蟠住山龍淵寺(りょうえんじ)の西側にあった泉が、仏前に供える水として「閼伽水(あかみず)」と言われていたことから、閼伽池と変り赤池に転じたという説があるが、「尾張国地名考」というには赤い色の池があったことによとも示されていて、いずれが正しいかは定かではないらしい。

赤池を出ると進路を西北西に取り、僅かな距離で平針(ひらばり)駅。駅の北東に赤池という地名の起源となった龍淵寺がある。平坦な土地を開墾したという意味の「平墾(ひらはり)」が転じて平針となったらしい。

原は、その昔新田開発された所で「原新田」と言われており、その中にも上原と下原があった。その名のごとく天白川の岸边に広がる平坦な土地。

植田という単純明快な地名ではあるが、古代の地形に由来する地名とのこと。古代の熱田以南の入り海に面した海辺の平坦地を「年魚市瀉(あゆちがた)」と言っていた。これが「吾湯市」「愛智」と転じ、「愛知」の県名に繋がっている。年魚市瀉の中で、比較的上の方にあった田は「上田」で下の方にあった田は「下田」と言われていたが、それぞれ「上田→植田」「下田→島田」と転じたと言われている。

塩釜口という駅名(地名)の由来が気になるが、前述の様に古代は入り海の場所だったことを考えれば何となく想像出来そうな気がする。駅の南西方向の御幸山にある塩竈神社の参詣口であることからこの地名が古くから定着しているとのこと。弘下年間(1840年代)に、地元の豪農が宮城県の塩竈神社から分霊を受けて祀ったのが起りだとされている。古代の地形からすると、この地は海辺で塩業・漁業の里だったと考えられるが、神社の起りがさほど古くもないのが気にはなる。

八事(やごと)で名城線を横切り町中に入っていく。八事山の固い岩盤の岩山を示す「岩(や)が凝(こご)る」という言葉が起源となっている。貞享3年(1686年)建立の真言宗八事山興正寺の門前町として街が形成されてきた。明治になると名古屋の保養地的な発展を遂げ、野球場・競馬場・遊園地などができた。その後財界の社交場・別荘地などとしても発展し、名古屋有数の高級住宅地となったが、現在は主要大学のキャンパスが集まる街になっている。

北西に向かって一直線に走り、いりなかという平仮名の名前の駅に入る。正式には(漢字で書くと)「杵中」なのだが、難読地名のため平仮名表記にしたと思われる。「杵」が付く地名は、谷が入り組んだ地形の所に多く存在する「入り」と同義らしい。東山から八事山にかけての丘陵地帯に刻まれた細かな谷が関係しているのかもしれ

ない。難読地名は安易に平仮名表記にするよりも、漢字で残しておいて意味を伝え継いで行く方が正しいような気がする。いりなか駅を出ると進路を西に変えて、山崎川の手前で**川名**駅に入る。川名は川菜・河菜の変形で、その昔川菜(水藻)を採ったことに由来する「川菜の神」を祭神として崇める風習が関係しているようだが、詳細は諸説あるらしい。付近に流れている川は山崎川だから川菜を採った川はこれだろう。駅の北西にある川原神社に川名弁天が祀られているが、これが関係しているらしい。

御器所(ごきそ)については、桜通線篇で触れているので省略する。桜通線を横切って、山王通を西に進むと**荒畑**という何かありそうな名の駅になる。地図で荒畑駅の周りを調べてみても、荒畑という町名は見当たらない。地下鉄開通以前に路面電車が走っている頃に荒畑という停留所があったらしいが地名の由来はわからなかった。荒畑駅を出ると鶴舞公園の下で右へそして左へカーブして、大須通りの下の**鶴舞**駅へ。地上ではJR中央線と名古屋都市高速環状線も交差している。名古屋の歴史資料の中では地名の由来は不明とされているが、古代は海辺で、鶴が多く飛来していたことによるという伝承と、「水流(つる)」「間(ま=水がよどむ場所を意味する)とする説とがあるようだ。地名の読みとして「つるまい」と「つるま」の二つが存在するようなので、こんなことも関係しているのかもしれない。

大須通りに沿って西北西に進み、新堀川を潜ると**上前津**。名城線との交差点になり、名古屋城の南面の城下町。前津という地名の起源を調べてみたら、前が海だったことから「前津」となったと言う説と、舞鶴が転じて「まえつ」となったという説とがあることがわかったが、詳細は不明。

ここまで大須通りを走っていたが、北に進路を変えて伏見通りを走るようになると**大須観音**。駅の東側に宝生院大須観音がある。正式名称は、真言宗智山派別格本山北野山真福寺宝生院。元亨4年(1324年)尾張国長岡荘大須郷(今の岐阜県羽島市大須)で能信上人により開山された。元弘3年(1333年)能信上人は、北野山真福寺宝生院という寺号をいただき、後に後村上天皇の御代に現在の場所に移された。

伏見通りを北へ僅かな距離で**伏見**駅。慶長年間に、伏見屋六兵衛という人が山城国(京都)から移り住んだことが地名の起源らしい。京都の伏見という地名は「伏し水」からきているようだ。

丸の内は、「桜通線の旅」にて記述のため省略。北上を続けてきた電車は、名古屋城を避けて堀川の西側へ移動して庄内通りを北に進み、**浅間町**駅に入る。交差点の東側に富士浅間神社がある。明応4年(1495年)富士山本宮浅間大社より勧請してこの地に奉じたのが始まりと尾張名所図絵に書かれている。富士浅間神社は大須観音の東側にもあるが、富士講の名残なのかもしれない。

浄心駅の出口①の目の前にあるのが曹洞宗浄心寺。文化8年(1811年)地元の農家がお堂を建てたのが始まりと言われている。あまり詳細な情報が出回っていないような小さなお寺さんが駅名に採用された経緯が知りたかったのだが、わからなかった。

庄内通駅は、文字通り庄内通りにある駅だが、庄内通りは庄内川に向かう道路として名付けられた。「庄内」という川の名前は、山田庄・一色庄などの「庄」の内を流れる川ということから名付けられた。水源は岐阜県恵那市の山中で、全長約80Km。

庄内緑地公園、庄内川の右岸に広がる広大な緑地公園の北端に駅がある。庄内川本流に矢田川が合流する地点にあり、戦時中は防空緑地として県が民間から土地を取得したが、戦後の農地解放により再び民間に返された。その後水害対策などの整備を兼ねて再び買収を進め、治水機能を含む緑地公園として再生した。

緑地公園を抜けて北西に進むと、城北線の下を潜ったあと左から来る名鉄犬山線と合流して、終点の**上小田井**(かみおたい)駅に入る。名鉄豊田市からの鶴舞線を経由して直通乗入れ運転も行っているようだが、豊田市・赤池間に比べると運転本数は少ないようだ。小田井は、庄内川と新川に挟まれた平地で、「田の水を司る」という意味を持つ地名とのこと。昔から川の氾濫に悩まされ続けてきた里らしい地名である。犬山に繋がる岩倉街道を行き来する野菜を運ぶ農民で賑わった所とのこと。

赤池から約20Km、鶴舞線の40分弱の旅はこれにて終了。古い地名が残る名古屋、大胆に開発を進めた結果「昔が消えてしまった名古屋」、新しい発想で新しいものに取り組む名古屋、等々名古屋経済圏の持つ様々な顔が見え隠れする街探訪は、それなりに面白いものだった。高校時代の友人との会食の約束地である栄を目指して、大急ぎでUターン。

以上